

## あ と が き — 付「諺」尾音索引 —

この尾音索引は、さきに公にした「日本語尾音索引」(現代語篇)の姉妹篇として「新明解古語辞典」(編者代表金田一春彦氏、三省堂刊、第1刷昭和47年12月15日、第16刷、年月不記)を底本にして作成したものである。底本としての使用を許可された金田一先生、並びに三省堂編集部に対し甚深の謝意を表したい。

と同時に、以下、本索引を作成する途中、あるいはその結果感じた若干の点を記し、「新明解古語辞典」(以下「底本」と称する)の編者に注文をつけ、あはせて読者の参考供にしたい。ただし、全体にわたって十分に精査したものではなく、たとへばこんなことがあるといふ指摘にとどまるものであることをあらかじめおことわりしておく。

## 1) 追込項目中の漢字のよみ方

底本は一つの親見出しの下にいくつもの子見出しを追ひ込んである場合が多いが、その子項目の立て方は、凡例にことわつてはあるが、種種のものがある。その子項目の中に仮名で見出されず(慣用句・ことわざ・枕詞等の連語の場合)、漢字表記のままのものがある。よみ方に不審なしと編者が考へられたものであろうが、利用者たる我々には、無知のゆゑによみ方にまよつたものがある。

とら【虎】の子項目に

虎を野に放・つ (底本 747 頁。以下頁数のみの場合は底本の頁)

せん-り【千里】の子項目に

— の野に虎(とら)を放・つ (595 頁)

とある。この「野」は「の」とよんでおいたが(「日本国語大辞典」などはさうよんでゐる)「や」とよみたい気持ちを禁じえない(もつとも「千里の野」は「や」は無理だらうが)。

はな【花】の下にある

— の宴 (837 頁)

は「— の色」と「— の弟(せう)」の間にある。「宴」は「うたげ」とも「えん」ともきめがたい。(ただし、「えん」としておいた。)

よ【世】の下

— に留ま・る (1047 頁)

の「留まる」は「とまる」か「とどまる」か。徒然草三十八段の例が引かれてゐるのでそれをみると仮名で「とどまる」とあつたので(日本古典文学大系本)「とどまる」としておいた。

そで【袖】の子見出し

—を留・める (603 頁)

の「留める」もまぎらはいしい。〈「袖詰め」をすること。〉とあり、「そでつめ」をみると〈「そでとめ●」に同じ。〉とある。その類推として、この場合は「とめる」と考へた。この「留」は「みみ【耳】」の子見出しとしては「—留(を)・む」とあり(972 頁)、「こころ【心】」の子見出しとしても「—留(を)・む」「—留(と)ま・る」「—留(と)・む」とよみが示されてゐる(389 頁)。「袖」の場合も同様の措置がほしい。

いかに-に【如何に】の下

—申し候 (63 頁)

おん-いり【御入り】の下

—候・ふ (207 頁)

か-やう【斯様】の下

—に候ふ者 (265 頁)

その-こと【其の事】の下

—に候 (605 頁)

なに【何】の下

—とも候へ (770 頁)

の「候」は「さうらふ」か「さふらふ」か。「さうらふ【候ふ・候】」の下にも  
—べく候 (438 頁)

とある。これは親項目としての関係からいつて「さうらふ」でよささうである。前の三例は掲げられた用例いづれも謡曲詞章である。「そのことに候」「なにととも候へ」は徒然草 109 段、125 段の用例が引かれてゐる。こんなところから判断して「さうらふ」としておいた。上掲のうち二番目のみ「候・ふ」とあり、他は「候」「候ふ」「候へ」であり、「候・ふ」「候・へ」となつてゐない。

ひ【日】の子見出しとして

—並・ぶ (854 頁)

がある。これだけでは「なぶ」か「ならぶ」か決まらない。万葉集 4442 番歌が引かれ「—・べて雨は降れども」とあるので、原典についてみると「比奈良倍 旦」とあり、やうやく「ならぶ」とわかるが、やはりよみを示してほしい例の一つである。ちなみに、独立項目としての「ひなら・ぶ【日並ぶ】」もあり(875 頁)、ここにも万葉 4442 番歌が挙つてゐる。本索引では当然ながらこの二つは連続して出てくる。

うま【馬】の下

馬の音 (144 頁)

むぎ【麦】の下

—の音 (980 頁)

の「音」。「馬の音」は「午の貝」の前にあるから「おと」とよんでおいたが、「日

本国語大辞典」は「馬の音(と)」である。これはオトカトかで位置のずれが大きい。

「麦の音」は「日本国語大辞典」,「麦の音(むぎ)」である。

あ・る【有る・在る】の下の

— 図 (54 頁)

これもよみを示して欲しいものである。

いかつ【厳つ】の下の

— を出・す (62 頁)

は-ぶし【歯節】の下の

— へ出・す (843 頁)

の「出す」,いづれも「だす」とよんでおいた。「いだす」は「出だす」(76 頁)とある。

おもひ【思ひ】の下の

— 立ったが吉日 (200 頁)

の「吉日」,「きちにち」が底本中にあるのでさうよんだが,よみを示して欲しい例である。

かういつた例はまだあるが,わが無知をさう書きたてるにも及ぶまい。

## ii) 項目の立て方 — 親見出しと子見出し —

「みたくない」といふ語を校正のため底本について逆引き検索しようとして実に長時間を要した。探し方が悪いといはればそれまでであるが,見つけた時には,少々意外の感を持った。この語は「み【見】」(956 頁)の子項目なのである。この「み【見】」といふ項目自体の必要性については論をまたないが,しかし,この子項目の「みたくない」はさがしにくい。同じことが「みしひと」といふ項目の場合もおこつた。「せう(連語)」をさがすにも難渋した。これは「せ(「す」の未然形)」といふ項下にある(576 頁)。「生住滅異」もさがすのに時間を要した。これは「しょう【生】」(519 頁)の項下にある。

上掲の如き体験から見当がつくやうに,底本の見出し語の立て方については,凡例だけでは十分わからぬ点がある。また,一々凡例にあたつては語をさがすといふこともないであらう。

「しんのぞう」は「しん【心】」の子見出し「— の臓」(549 頁)であり,「じんのぞう」は独立項目「じんのぞう【腎の臓】」である(554 頁)。もつとも,これは「じん【腎】」といふ親見出しがないから当然の処置であるが,本索引をみて,底本に当たると少々異様に感じる。

「ふかし【深し】」を含む語をみると,

秋深し 「秋」の子項目 (7 頁)

奥深し 親項目(おく【奥】の親項目もあり,166 頁) (168 頁)

木深し 親項目(こ-【木】(造語形)の親項目あり,375 頁) (417 頁)

もの深し 親項目(もの-【物】(接頭)の親項目あり,1005 頁) (1008 頁)

染み深し 親項目(しみ【染み】の親項目なし)(515頁)

夜深し 「夜深」の子項目 (1058頁)

至り深し 「至り」の子項目 (77頁)

色深し 「色」の子項目 (112頁)

心深し 「心」の子項目 (391頁)

となつてゐる。この連続で底本を検索していくと、やはり素直にうなづけぬものがある。「木深し」「もの深し」の扱ひは同じである。他の同様の例の扱ひも同じ。ただ、「ものー【物】」と漢字が宛てであるのに、具体的な一語一語は、「もの深し」のやうな扱ひであるのはどうしてだらうか。これは別の問題である。「染み深し」も「しみ」といふ親見出しがない以上当然の処置である。ただ、「奥深し」は何故独立項目なのか。同じ子見出しでも「夜深し」は「よ【夜】」の子項目でなく、「よぶか【夜深】」の下にある。

こと【事】の下

— な・し(連語) (406頁)

と親見出しの

ことなし【事無し】(名・形動ナリ) (409頁)

とをみると、前者は<①何事もない。穩やかだ。>とし、<「吾がために妹も——く」(万4, 534)「上には——きやうなれども、下には用心して」[平家3, 赦文]>が用例として掲げられ、また、<②容易だ。「煩はしかりつことは——くて」[徒然189]>とある。後者は<①平穩無事なこと。「——に過ぐす月日も」[後撰・夏]②セックスが行なわれないでしまうこと。「——にて過ぐしつる年ごろもくやしう」[源・須磨]>とある。一応、品詞的な区別があり「ことな・し」か「ことなし」か見出しの形も異なるが、意味的には同様である。別々に見出されることは不便ではないか。

「夢の浮き橋」は「夢」の子項目で(1044頁)、<夢の中の通路>と注される。

「夢の浮橋」は独立の項目で(1044頁)<奈良県の吉野川名所である夢の淵(た)に渡した浮き橋>とある。この扱ひもどうであらうか。

じゃう【情】の下に

— 強<ㄱ>し (520頁)

がある。又522頁に、独立して「じゃうーごは【情強】」がある。音に多少差がある。意味は、前のは<意地が強い。強情だ。>、後のは<強情。片意地。また、強情な人。>とほぼ同じい。別々にある必要はないやうに思ふ。ただ、「夜深」、「夜深し」のやうには、音の関係からできぬことはわかるが。ただし、音が違つても、一項目中にあるものもある。今の例と音の違ふ部分が逆になるが、「だんーかふ【談合】」の子項目に、「だんがふーづく【談合尽く】」、「だんがふーばしら【談合柱】」がある(658頁)。

「くち【口】」の子項目に「— 強<ㄱ>・し」があり、意味は<口のきき方が強い。

……>とあり(325頁),「くち-ごは・し【口強し】<口を取りにくい。……>は独立項目である(326頁)。一つにはできぬが,親項目,子項目の違いはわかりにくい。「耳近し」は独立項目(973頁),「耳敏し」は子項目(972頁),「みめ-よし【眉目佳し】(名)」は独立項目(973頁),別に「み-め【見目・眉目】」の子項目として「—佳(よ)・し」もある(973頁)。「心無し(名)」,「心なし(連語)」は共に「こころ【心】」の子項目(389頁),「甲斐なし(名)」,「甲斐無し(形ク)」は共に独立項目である(254頁)。項目の立て方と共に「なし」「無し」の部分にも注意される。「沙汰なし(連語)」(さた【沙汰】の子項目,454頁),「沙汰無し(形動ナリ)」(455頁)も同じである。

「胸当て」(986頁)「頬当て」(926頁)「腹当て」(847頁)はいずれも鎧の部品名で,それぞれ独立項目であるに対し,「額当て」(867頁)は鎧の部品名でないからではないと思ふが,「ひたひ」の子項目扱いである。また「行く秋」「行く方(かた)」「行く川」「行く瀬」「行く年」「行く春」は「ゆく」の子項目である(1039頁)に対し「行く先」「行く末」「行く手」「行く方」などは独立項目である(1039頁)。ほぼ,その違いもわかるやうにも思へるが,「ゆくすゑ」と「ゆくかた」など微妙である。

かた【肩】の下に

— 灼(や)・く (236頁)

とあり,また,「かた-や・く【肩灼く】(自動四)」と独立の見出しもある(241頁)。かかれてゐる意味は同じである。用例は違ひこそすれ,共に万葉集歌である。両方に出すことが一つの方針ならば便利であるが,さうでもないと思はれる。

め【目】の下に

— 叩(たた)・く (989頁)

とあり,独立の見出しとして「め-たた・く【瞬く】(自動四)」もある(994頁)。なほ,前者の用例,「目もたたかず,よく見て候ふぞかし【宇治拾遺 11.129]」とあるのをみると,単に「目」と「叩く」が密接に結びついて用ゐられることを示してゐるだけのやうにも解釈される。あるいは,この用例は不適当ではないかとも考へられる。

あな(感)の下に

— かして(連語) (29頁)

があり「→あなかしこ(副・感)」と指示する。独立項目の「あな-かしこ」は<■(副) ■(感)>とある(30頁)。補注版においては,独立項目とした理由が述べられてゐる。ただ,別々にあることは便利なやうでもあり,不便なやうでもある。

以上のべたやうな例はまだいろいろあるが,あと一つでやめる。

おし-ごと【押し言】

おし-ごと【押し事】 (171頁)

はこの順に,それぞれ別の親見出しである。

ただ-こと【徒言】

ただ-ごと【徒事】 (635 頁)

は音が違ふものと考えてあるから勿論別の見出しである。ところが、

さか-ごと【逆言】【逆事】 (439 頁)

なが-ごと【長事】【長言】 (757 頁)

まが-こと【禍事】【禍言】 (932 頁)

うち-つけ (形動ナリ)

— ごと【— 言】【— 事】 (133 頁)

よし-な・し【由無し】

— ごと【由無し事】【由無し言】 (1052 頁)

あだ-ごと【徒言】【徒事】 (23 頁)

しのび【忍び】

— ごと【忍び言】【諄】【忍び事】 (506 頁)

わび-ごと【侘び事】【侘び言】 (1088 頁)

わび-ごと【詫び言】【詫び事】 (1088 頁)

いたづら【徒ら】

— ごと【徒ら言】【徒ら事】 (76 頁)

なほ-ざり【等閑】

— ごと【等閑言】【等閑事】 (774 頁)

かへり【返り】【返り・帰り・還り・反り】

— こと【返り言】【返事】 (257 頁)

ふる-ごと【故事】【古言】 (907 頁)

ざれ-ごと【戯れ言】【戯れ事】 (470 頁)

しれ-ごと【痴れ言】【痴れ事】 (547 頁)

みだれ【乱れ】

— ごと【乱れ言】【乱れ事】 (964 頁)

すずろ【漫ろ】

— ごと【漫ろ事】【漫ろ言】 (565 頁)

そぞろ【漫ろ】

— ごと【漫ろ事】【漫ろ言】 (601, 602 頁)

は、上掲の如く、同一項目中に【】として出てくる。共に親項目であるものとどう違ふか。「かへりこと」のみ、親項目も【】を出したが、「かへりこと」は「かへり」【】の下の子項目であることを示す必要ありと考へたからである。他にも、「いたづらごと」も「いたづら」【】の子項目であるが、【】共漢字は同じ、つまり【】より前に【徒ら】があるので、【】は示さなかつた)。更に、「事」と「言」の先後は何か意味があらうか。また、かうならべてみると、「まがこと」「かへりこと」の「こと」が目につく。

尾音索引の領分ではないが、「こと」が上につくものについても同様の問題がある。

この項については、底本立項方針について、必ずしもよく理解してゐないこともあり、無用のことものべたかと思ふが、卒然と底本を使ふものの感じと考へていただければありがたい。

### iii) 漢字のあて方

本索引は、現代語篇の場合同様、二つ以上の漢字があてられてゐても、第一番目のものしか採らなかつた（ただし、現代語篇では、■●…とあつて、たとひ別の漢字があつても■の第一番目しか採らなかつたが、本篇では例言に述べたやうに■以下も漢字が異なるごとには採取してある。しかし、それ、■●…それぞれ原則として第一番目のものしか採らなかつた）。このためにおこる誤解については、現代語篇の「あとがき」のそのあとにつけたことわり書きと同じことをのべる必要がある。すなはち、

きつきげ 黄鵠毛

さびつきげ 宿鵠毛

しらつきげ 白月毛

くろつきげ 黒鵠毛

といふ並びが出て来てをり（本篇 64 頁）、これを見る人にいぶかしさを感じさせる可能性が十分ある。

底本では、

き-つきげ【黄鵠毛】（291 頁）

さび-つきげ【宿鵠毛・宿月毛】（461 頁）

しら-つきげ【白月毛・白鵠毛】（544 頁）

くろ-つきげ【黒鵠毛・黒月毛】（344 頁）

となつてゐるのである。この第一番目の漢字だけを採つた結果である。

むながい 胸繫

おもが い 面繫

しりが い 尻繫

さんが い 三繫（本篇 2 頁）。

これだけをみれば何といふこともないが、

こぶさのしりが い 小絵の鞆

ともある（本篇 2 頁）。前の四項はいづれも「がい」が「繫」で、つながりが見てとれるが、同じ「しりがい」が「鞆」となる。底本では

むな-がい【胸繫・鞆】（985 頁）

おも-がい【面繫・鞆】（196 頁）

しり-がい【尻繫・鞆】（546 頁）

さん-がい【三繫・三鞆】（473 頁）

こぶさ-の-しりがい【小絵の轍】(418頁)

とある。この点、本篇利用者におことわりしなければならない。底本編者にもおことわりしたい。なほ

かづさしりがひ 上総轍(本篇168頁)

は底本(244頁)に従ったが、これでいいだろうか。

このほか、例言に述べたとほり、本篇では一つの見出しの下に■●…とあり、それぞれに別の漢字があてられてゐる場合、それを別々に採取した。この場合、■●…にそれぞれ全く別の漢字があててあれば問題ないが、複数の漢字があててあつて、その一部が異なるといふ時は若干原則どほりにはいかない。

もと ■【本】 ■【本・旧・故・元】 ■(副) 四【許】(1002頁)は、■と■の場合、第一番目どうしでは同じとなり、別々に採取する意味がうすれる。それで、この場合は、

もと 本

もと 旧

もと 許

とした。■は、本索引が漢字中心にしたため採取されなかつた。この点に問題を残した。が、今回は一見出し語の下で、二つ以上の項目に採取するのは、別の漢字があてられてゐるものに原則として限つた。

あづま ■【吾妻】 ■【東】 ■【東・吾妻】(27頁)は、「吾妻」「東」の二項、

しのぶ ■【偲ぶ・慕ぶ・賞ぶ】 ■【忍ぶ】 ■【忍ぶ】 四【忍・忍ぶ】  
(507頁)

は、「偲ぶ」「忍ぶ」「忍」の三つである。

はふ ■【這ふ】 ■【延ふ】 ■【延ふ】 四【延ふ】 (843頁)

は、「這ふ」「延ふ」の二つである。

のぶし ■【野伏し・野臥し】 ■【野伏・野武士】 (813頁)

は変則ではあるが、わかりやすさを考へ「野伏し」「野武士」とした。

やまぶし ■【山伏し・山臥し】 ■【山伏】 (1032頁)

は、「のぶし」のやうにはいかぬので、「山伏し」「山伏」である。

ながえ ■【長柄】 ■【長柄・轅】 (756頁)

は、「長柄」「轅」

おほいど ■【大子】 ■【大子・大御】 (185頁)

は、「大子」「大御」

いばら ■【茨】 ■【茨・薔薇】 (98頁)

は、「茨」「薔薇」

かへり ■【返り】 ■【返り・帰り・還り・反り】 (257頁)

は、「返り」「帰り」



すなはち ㊦【即ち・則ち】 ㊦【即ち・則ち・乃ち・輒ち】 (569 頁)  
 は、「即ち」「乃ち」の二項目である。また、

もともと ㊦【最も】 ㊦【尤も】 ㊦【尤も】 (1001 頁)  
 は、「最も」「尤も」の二つ

ありつく ㊦【在り付く】 ㊦【有り付く】 ㊦【有り付く】 (53 頁)  
 も、「在り付く」「有り付く」の二つである。さらに

おとど ㊦【大殿】 ㊦【大臣】 ㊦(漢字なし) (178 頁)  
 は、前記「もと」同様、「大殿」「大臣」の二つとなり、三の〈婦人の敬称〉として  
 の「おとど」はおちてしまふ。

「のぶし」の場合もすでに原則と少しはづれたわけであるが、容認されるもの  
 と思ふ。次は、少し別のもので、二つの見出しになつてゐる場合のことを述べる。

ねり-もの ㊦【練り物】 ㊦【煉り物】

ねり-もの 【練り物・遡り物】 (807 頁)

は、原則にてらせば、

ねりもの 練り物

ねりもの 煉り物

ねりもの 練り物

となる筈であるが、

ねりもの 練り物

ねりもの 煉り物

ねりもの 遡り物

とした。同様に

きみ 【君】 ㊦(名) ㊦(代名)

きみ 【君・公】 (名) (298 頁)

くわう-りゃう 【広量】

くわう-りゃう 【広量・荒涼】 (346 頁)

は、

きみ 君

きみ 公

くわうりゃう 広量

くわうりゃう 荒涼

とした。ただ、かやうな例はあまり多くはない。

この逆の場合、

よど 【淀・澱】

よど 【淀】 (1056 頁)

は、

よど 澱

よど 淀

としてある。そのほか、前に原則として、一見出し語の下では別の漢字があてられてゐる場合に限り二項以上採取したとのべた(本篇 294 頁)。

まささま ■【勝—】 ■(漢字なし) (937 頁)

さくり ■【噫】 ■【噫泣】 ■(「さくる」の連用形) (445 頁)

そこそこ ■【其処其処】 ■(副) (600 頁)

の類は

まささま 勝さま

さくり 噫

さくり 噫泣

そこそこ 其処其処

とし、原則どほりで、かういふ例はかなりある。逆に

いちこ ■(漢字なし「巫女」の意) ■【市子】 (78 頁)

かつて(副) ■(漢字なし) ■【曾て・嘗て】 (244 頁)

は、

いちこ (名)

いちこ 市子

かつて (副)

かつて 曾て

とした。ただ、かういふ例は僅少である。もう一つ少々趣を異にするものがある。

お-もの【御物】(名) ■【御膳・御飯】 ■(漢字なし) (198 頁)

なにさま【何様】 ■【何方】 ■(副) (771 頁)

底本の漢字のあて方は

みだし【漢字】 ■… ■…

又は、

みだし ■【漢字】 ■【漢字】

のごときが通例であるが、上記の如きもある。「御物」「何様」は項全体にかかり、特に■では「御膳・御飯」「何方」とあててが適切である、といふことを示すものと解するが、この扱ひは次のやうにした。

おもの 御膳

おもの 御物

なにさま 何方

なにさま 何様

なほ、■…の下位項に①②…とあり、そこに別の漢字のあてられたものがある。

さ・す ■【差す・指す】 ■【刺す・挿す】 ■【差す】

とあり、■の下に、⑤【障す】とある(453 頁)。

なか【中】①②【仲】③④ (755 頁)

の②【仲】の如きものである。

この「障す」「仲」は今回は無視した。

#### IV) 底本見出し語の表記

主として、子見出しについての問題である。子見出しの表はし方はいろいろある。ある親見出しの下に「——」はその親見出しと同じであると思はれる。これが底本凡例の示すところであるし、最も普通である。

み・くに【御国】

—— ことば【御国言葉】

—— ぶみ【御国文】 (959 頁)

これは当然

みくにことば 御国言葉

みくにぶみ 御国文

と復元した。

【 】内の「——」はその部分、漢字があたらぬことを意味する。

みか-しほ【——潮】 (958 頁)

み-かじ-る【見——】 (958 頁)

み-か-ぬ【見——】 (958 頁)

これらは、

みかしほ みか潮

みかじる 見かじる

みかぬ 見かぬ

とした。

やはら-【柔ら】

—— こ・い【柔ら——】 (1027 頁)

さら-ぬ(連体)

—— 体(ふ) (467 頁)

らっ-し【藤次】

—— もな・い (1065 頁)

ちみどろ-ちんがい【血——】 (668 頁)

はそれぞれ

やはらこい 柔らこい

さらぬてい さらぬ体

らっしもない 藤次もない

ちみどろちんがい 血みどろちんがい

と復元したが、特に問題はなからう。ところが、

みくり【三稜草】

—— なは【——繩】

— の簾(すだ) (959 頁)

といふ項がある。後の項は

みくりのすだれ 三稜草の簾

でよからう。しかし、前の項は「みくり」に「三稜草」をあてるのが【—】とあることからばかれる。これは底本凡例でいふところの「—で省略せずもう一度全体を示した」(「この辞典を使う人のために」4 頁)といふものに当たるべきものではなからうか。

おの-れ【己れ】

— ざき【己れ咲き】

— やれ(感) (181 頁)

この後の項も同様である。

しるし(名) ■【標・印・徴・験】 ■【璽】

験(書)の杉(書)

— の頼み

— ばかり (547 頁)

のごときは、「—」は漢字に復元しにくかつた。また、■…とある場合、■は単に以下の子項目の「—」部分を示すために設けられてゐるごとく思はれるものがあるが(かへし、かへりの■などは、まさに以下の子項目のためにあるやうにみえる。その他「ながし」「はしり」「はじめ」「まぎれ」「まち」など動詞連用形の例が多くある。)この例は違ふやうである。もつとも、ほかにも、<みぐし■【御髪】■【御頭・御首】— あげ【御髪上げ】>ともあるので(959 頁)さうとは限らぬやうである。

いつくす-きはみ【い尽くす—】 (85 頁)

などは、「きはみ」=「極み」と考へてもよさうだが、底本に従ひ、

いつくすきはみ い尽くすきはみ

とした。この宛て漢字に関しては、他にも述べるべきことが多いが省略する。

#### V) その他

いす-の-かみ【石の上】 (73 頁)

には<「いそのかみ」に同じ。>とある。見てみると

いそ-の-かみ【石の上】枕…… (74 頁)

とある。本索引では、この場合、例言に述べたやうに「(枕)」と示したが、前者には示してない。底本のままである。

ぎやうがう【行幸】 (300 頁)

補注版に、これをギャウガウとよむべきことが注されてゐる。一方、

てう-きん【朝覲】 (710 頁)

— の行幸 <ぎやう>

である。

だい-きやう【大饗】（614頁）

ひさし【庇・廂】

—の大饗 <だ<sup>い</sup>きやう>（864頁）

も-や【母屋・身舎】

—の大饗 <な<sup>い</sup>きやう>（1011頁）

だい-じん【大臣】

—の大饗 <だ<sup>い</sup>きやう>（617頁）

「母屋の大饗」のよみ方、何か違ふ根拠があらうか。

なかつかさ 中務

ときづかさ 時司

あげづかさ 上げ司

かけづかさ 懸官

うたづかさ 雅楽寮

のづかさ 野司

おほひづかさ 大炊寮

ゑふづかさ 衛府司

いへづかさ 家司

おほづかさ 大学寮

うまづかさ 馬司

みぎのうまづかさ 右の馬寮

ひだりのうまづかさ 左の馬寮

かみづかさ 神祇官

たくみづかさ 内匠寮

かむづかさ 神官

かむづかさ 神祇官

とのもづかさ 主殿寮

とのもづかさ 殿司

みやづかさ 宮司

ふむやつかさ 大学寮

くらづかさ 内蔵寮

くらづかさ 蔵司

さきもりづかさ 防人司

とのもりづかさ 主殿寮

とのもりづかさ 殿司

このゑづかさ 近衛府

かもんづかさ 掃部寮

かもんづかさ 掃部司

ゐんづかさ 院司 (本篇 74 頁～75 頁)

上掲の諸項は連続したものではない。

すないものまうすつかさ 少納言

おはきものまうすつかさ 大納言

のごとき、「活用語連体形+つかさ」の形のもの、

みきのつかさ 造酒の司

みぎのつかさ 右の司

のごとき、「—のつかさ」の形のものが上掲諸項の間にある。ところが、かう抜き出してみると、「なかつかさ」「おほつかさ」「ふむやつかさ」「さきもりつかさ」が連濁してゐないといふことを考へさせる材料になる。「日本国語大辞典」では「ふむやつかさ」が、このままの形ではないが、連濁した形になつてゐるのが気にかかる。

すがかさ 菅笠

なにはすががさ 難波菅笠

かがすげがさ 加賀菅笠

あふみすげがさ 近江菅笠

かういふ順で出てくるわけではないが(二番目と三番目の間に六項入る),これをみると問題が感じられる。底本掲載の用例を見ると,「すが—」が万葉集,「すげ—」が近世の用例と分れるのが面白い。と同時に,「—かさ」,「—がさ」には不安を感じる。

編者の主張のあると思はれる

かいひゃく 開白

けいひゃく 啓白

や

げんけう 顕教

げんみつ 顕密

にも注意をひかれた。

じゃうも-だき【焼亡焚き】⇨「せうもだき」 (527 頁)

せうも-だき【焼亡焚き】 (580 頁)

とあるに対し

はう-びき【宝引き】 (820 頁)

はう-びき【宝引き】 (917 頁)

とあり,これには両方に西鶴織留の文が用例として引かれてゐる(同じものではない)。

以上気づいた点いろいろ乱雑に述べたが意とするところおくみとり頂ければ幸ひである。

## vi) 諺について — 付、諺一覧

次に諺について所要の点を記し、底本所収の諺を尾音索引の形で一覧する。

諺は当初除外の方針でのぞんだ。文の形になるものは必ずしも尾音索引の目的の第一義としては不要と思つたからである。ところが、原稿点検、底本逆引き、校正をすすめるにつれて、次の如き点に気がついた。すなはち、同じやうなものが一方では[諺]とされ、一方ではさうされてゐないこと、当然諺とあつてもよさうなものが諺とされてゐないこと、また、諺とは違ふが、文の形をとつた警句、きまり文句、あるいは、きまり文句ともいへぬ一章句等が見出しとして収載されてゐること等々である。例へば

唐へなげ金

は、「たう【唐】」(622頁)の項下では[諺]とされ、「から【唐・漢】」(266頁)の項下では、特に諺とはされてゐない。勿論この二つが別々でないことは、後者に<「唐<唐>へ投げ金」に同じ。>とあることで明らかである。

夫婦は二世 (887頁)

は[諺]であるが、

親子は一世(ひと) (204頁)

主従は三世(さん) (533頁)

は共に諺とされてゐない。しかも、それぞれに<↔「親子は一世」「主従(しゅじゆう)は三世」><↔「夫婦は二世」「主従は三世」><↔「親子は一世」「夫婦は二世」>と参照すべき対語として示されてゐる。

三人寄れば公界(こうがい) (478頁)

積善の家に余慶あ・り (529頁)

積悪の家には必ず余殃(あふ)あ・り (581頁)

石を抱きて淵(ふち)に入・る (71頁)

田も遣(や)らう、畦(ぜい)も遣らう (612頁)

鰯網で鯨を捕る (114頁)

などは諺とはいへぬまでも、諺辞典等にはいれられてゐる。故事成語と峻別はむつかしい。なほ、「積善の…」は「しゃくぜん」の項下に、「積悪の…」は「せきあく」の項下にある。親見出しとしては「しゃくあく」「せきぜん」ともにある。

そのほか、

気色が重・い (288頁)

気色が悪・い (288頁)

足元が軽・い (20頁)

お手を上げられい (177頁)

狐を馬に乗せたやう (293頁)

の如き文又は文に近いものや、

盗人に追ひ (799頁)

眉間の白毫<びやく>(959頁)

の如き「—の—」「—に—」と一語といへぬもの、あるいは、前掲の文形のものと同じであるが

豊破れては、霧不斷の香を焚(た)・く (110頁)

霧不斷の香<霧>を焚(た)・く (308頁)

の如きものが項目として収載されてゐる。最後の例については別種の問題もあらうが、上掲の各例、いづれも、単に「霧」とないばかりに本索引の項目として収められてをり、「霧」とあるものの扱ひと比べると、いささか均衡を失してゐるといはれても仕方ない。

文形式のものは、尾音索引ないし辞典の目的の第一のものでないとはいへ、これを収載することに全く意味のないことではない。言葉さがしの面ではむしろ随分有効である。なにより、「新明解古語辞典」の尾音索引と銘打つからにはこれらを除外することの方が不当であらう。

ただ、一方では、文形式のものは諺同様全部除外しようとも考へた。しかし、それはいたづらに混乱させるだけであるとの判断に達し、つひに、形式的に「霧」とあるもののみを除外する方針を立てたのである。以上の如く、種々の点に思ひをめぐらせた。初校全部すんだ後、もう一度諺も挿入しようと思へたが、これも種々の困難があつた。その埋め合はせとして、底本にある諺を全部ここに揭示しようと思ふ。(尾音索引の形による。)

#### 新明解古語辞典収載諺一覧(「霧」とあるもののみ)

##### ア行

ししくうたむくい	獣食うた報い
ちごくのさたもかねしだい	地獄の沙汰も金次第
きじもなかずばうたれまい	雉子も鳴かずば討たれまい
ちごくのちざう	地獄の地藏
ちやうじゃのまんどうよりひんじゃのいっとう	長者の万燈より貧者の一燈
ちごくでほとけにあったやう	地獄で仏に会ったやう
さけはひやくやくのちやう	酒は百薬の長

##### カ行

さけはうれひのたまばうき	酒は憂ひの玉簪
へたのよこずき	下手の横好き
めくらのかきのぞき	盲の垣覗き



ちゃばらもいっとき	茶腹も一時
へたのながだんぎ	下手の長談義
てがあげばくちがあく	手が明けば口が明く
ちごくのかまのふたもあく	地獄の釜の蓋もあく
かべにうまのりかく	壁に馬乗りかく
とをかのきく	十日の菊
きいてごくらくみてちごく	聞いて極楽見て地獄
いたごいちまいしたはちごく	板子一枚下は地獄
だいかいをてでせく	大海を手でせく
みならぬきにはかみがつく	実ならぬ木には神がつく
つちでにははく	槌で庭掃く
さはりさんびゃく	触り三百
あくじせんりをゆく	悪事千里を行く
おくをきかうよりくちきけ	奥を聞かうより口聞け
ひとごといはばむしろしけ	人事言はば筵敷け
おもににこづけ	重荷に小付け
おやににぬこはおにこ	親に似ぬ子は鬼子

### サ行

だいじのまへのせうじ	大事の前の小事
くらがりからうし	暗がりから牛
けいせいにまことなし	傾城に誠なし
くれないはそのふにうゑてもかくれなし	紅は園生に植ゑても隠れなし
ぐにんなつのむし	愚人夏の虫
したちはすきなりぎょいはよし	下地は好きなり御意はよし
とうだいもとくらし	燈台もと暗し
くちのとははみをがいす	口の虎は身を害す
あめつちくれをうごかさず	雨つちくれを動かさず
たつとりあとをにござず	立つ鳥あとを濁さず
ちゅうしんはにくんにつかへず	忠臣は二君に事へず
うしはぐわんからはなとほす	牛は願から鼻通す
たかはうゑてもほをつまず	鷹は飢ゑても穂をつまず
たいかうはさいきんをかへりみず	大行は細瑾を顧みず
しかをおふれふしはやまをみず	鹿を逐ふ獵師は山を見ず
たいかはいちぼくのささふるところにあらず	大廈は一木の支ふる所にあらず
おごるへいけはひさしからず	驕る平家は久しからず

いちもんをしみのひゃくしらず	一文惜しみの百知らず
ろんごよみのろんごしらず	論語読みの論語知らず
おんやうじみのうへしらず	陰陽師身の上知らず
あめはつちくれをやぶらず	雨はつちくれを破らず
ほとけつくてたましひいれず	仏作って魂入れず
すずめひゃくまでをどりをわすれず	雀百まで踊りを忘れず
つきにむらくもはなにかぜ	月に叢雲花に風
うまのみみにかぜ	馬の耳に風
こはさんがいのくびかせ	子は三界の首かせ
ふうふはにせ	夫婦は二世
たからはみのさしあはせ	宝は身のさしあはせ
だうぐとにようばうはありあはせ	道具と女房はありあはせ

### 夕行

ひんのぬすみにこひのうた	貧の盗みに恋の歌
すまうもたつかた	相撲も立つ方
あかもみのうち	垢も身のうち
うちよりそだち	氏より育ち
さるがもち	猿が餅
あいたくちにもち	開いた口へ餅
あしもとからとりがたつ	足元から鳥が立つ
おにのねんぶつ	鬼の念仏
あさだいもくにゆふねんぶつ	朝題目に夕念仏
せたいぶっぼふはらねんぶつ	世帯仏法腹念仏
きみはふねしんはみづ	君は舟臣は水
こうやのあさって	紺屋のあさって
くわはうはねてまで	果報は寝て待て
せんどううまかたおちのひと	船頭馬方お乳の人
はやうしもよどおそうしもよど	早牛も淀遅牛も淀
おそうしもよどはやうしもよど	遅牛も淀早牛も淀

### ナ行

いりまめにはな	煎り豆に花
こぬかさんがふあるならばいりむこするな	小糠三合あるならば入り婿するな
せけんのくちにとはたてられぬ	世間の口に戸はたてられぬ

せにはらはかへられね	背に腹はかへられぬ
たうへなげがね	唐へ投げ金
ちうちんにつりがね	提燈に釣鐘
みすぎはくさのたね	身過ぎは草の種
すぎはひはくさのたね	生業は草の種
いのちがものだね	命が物種
いのちあつてのものだね	命あつての物種
ぬすびとのひるね	盗人の昼寝
たからはわきもの	宝は湧き物
みはならはしもの	身はならはしもの
こひはくせもの	恋は曲者
みはならはしもの	身はならはしもの
じふにんよればとくにのもの	十人寄れば十国の者
よははりもの	世は張り物
あはせものははなれもの	合はせ物は離れ物
たうらうがをの	螳螂が斧

## ハ行

つちぼとけのみづあそび	土仏の水遊び
ちゅうげんはみみにさかふ	忠言は耳に逆ふ
えんにつるればたうのものをくふ	縁につるれば唐の物を食ふ
すいがみをくふ	粹が身を食ふ
かめのかふよりとしのこふ	亀の甲より年の劫
みみとってはながわらふ	耳取って鼻が笑ふ
けふはひとのうへあすはみのうへ	今日は人の上明日は身の上
ぬれぬさきこそつゆをもいとへ	濡れぬ先こそ露をも厭へ
すぐちがゑくぼ	兎口が齧

## マ行

こうやのしろばかま	紺屋の白袴
あこぎがうらにひくあみ	阿漕が浦に引く網
くににぬすびといへにねずみ	国に盗人家に鼠
いきみはしにみ	生き身は死に身
かべにみみ	壁に耳
みみとってはなかむ	耳取って鼻かむ

けをふいてきずをもとむ	毛を吹いて疵を求む
うまれぬさきのむつきさだめ	生まれぬ先の極祿定め
やぶにめ	藪に目
おににころも	鬼に衣
おほかみにころも	狼に衣

## ヤ行

いしにたつや	石に立つ矢
うまにはのってみよひとにはそうてみよ	馬には乗ってみよ人には添うてみよ

## ラ行

げすのちゑはあとから	下衆の知恵はあとから
ものいはじちちはながらのはしばしら	物言はじ父はながらの橋柱
きやうにゐなかり	京に田舎あり
しんあればとくあり	信あれば徳あり
しづむせあればうかふせもあり	沈む瀬あれば浮かふ瀬もあり
うをどころあればみづどころあり	魚心あれば水心あり
みづどころあればうをどころあり	水心あれば魚心あり
けいまのたかあがり	桂馬の高上がり
ごまめのはぎしり	鱧の歯ぎしり
ぎこのととまじり	雑魚のととまじり
たいよくはむよくににたり	大欲は無欲に似たり
つるぎのはわたり	剣の忍渡り
しんはなきより	親は泣きより
うしにひかれてぜんくわうじまり	牛にひかれて善光寺参り
つきよにかまをぬかる	月夜に釜を抜かる
せんりのみちもいっばよりおこる	千里の行も一步より起こる
くわんがくゐんのすずめはもうぎうをさへづる	勸学院の雀は蒙求を囀る
きりんもおいぬればどばにおとる	麒麟も老いぬれば驚馬に劣る
とひやちやうじゃににる	問屋長者に似る
ちやうじゃのはぎにみそをぬる	長者の脛に味噌をぬる
いっすんのびればひろのびる	一寸延びれば尋延びる
ちやうちんほどのひがふる	提燈ほどの火が降る
たからの	宝の山へ入りながら手を空しくし
やまへいりながらてをむなしくしてかへる	て帰る

うまをうしにのりかへる 馬を牛に乗り換へる  
 うしをうまにのりかへる 牛を馬に乗り換へる  
 あめふってちかたまる 雨降って地固まる  
 すずめのすもくふにたまる 雀の巢も構ふに溜まる  
 すいがかはへはまる 粋が川へはまる  
 あきのしかはふえによる 秋の鹿は笛に寄る  
 ありのあなからつつみもくづれる 蟻の穴から堤も崩れる  
 をとこのところ

とだいぶつのはしらはふとうてもふとかれ 男の心と大仏の柱は太うても太かれ  
 へうたんのかはながれ 瓢箪の川流れ  
 あきなひはうしのよだれ 商ひは牛の涎  
 うしはうしづれ 牛は牛連れ  
 うまはうまづれ 馬は馬づれ  
 うまにのるまではうしにのれ 馬に乗るまでは牛に乗れ  
 くじのたふれ 孔子の倒れ  
 たろべゑあゆびゃれ 太郎兵衛歩びゃれ

## ワ行

ころばぬさきのつゑ 転ばぬ先の杖  
 しらぬかほのはんべゑ 知らぬ顔の半兵衛  
 やきとりにへを 焼き鳥に綜緒

## ン

うしのいっさん 牛の一散  
 つきよにちゃうちん 月夜に提燈  
 ありのおもひもてん 蟻の思ひも天  
 いしのうへにもさんねん 石の上にも三年  
 わざはひもさんねん 災も三年  
 うしにきょうもん 牛に経文  
 をとこははだかひゃくくわん 男は裸百貫

以上

\*

\*

\*

校正を終つての所感を若干のべ、長すぎるあとがきを終へる。

いた-て【痛手】《後に「いたで」》（77頁）

さわ・く【騒く】《平安時代以後「さわぐ」》（471頁）

しのびごと ■【誄】《上代は「しのひこと」》 (506 頁)

ほそち (名) 《「ほそおち」の約という》 (920 頁)

といふ注記をもつ項目、▽印によつて、同様のことを示すものもある。

びこ-しゃこ (副) の項 ▷=「びくしゃく」 (863 頁)

ほし-づきよ【星月よ】 ▷=「ほしづくよ」 (920 頁)

ほふ-し【法師】 ▷=「ほっし」 (925 頁)

また、

た-かい【他界】■ (名) ■ (名・自動サ変) (626 頁)

あん-をん【安穩】(名・形動ナリ) (59 頁)

うち-こ・む【打ち込む】■ (他動四) ■ (自動四) (132 頁)

-こそ ■ (係助) ■ (終助) ■ (接尾) (400 頁)

といふ項目が多数ある。今回、これらは

いたて 痛手

さわく 騒く

しのびこと 誄

たかい 他界

あんをん 安穩

うちこむ 打ち込む

-こそ (係助)

としかしてない。これらに関していへば、かなりの成分が捨てられたことになる。(「いたで」「さわぐ」「しのひこと」「ほそおち」は項目としてはない。「びくしゃく」はあるが「ほしづくよ」「ほっし」の項目はない。)また、前述したやうに、■…とあつても別漢字があててあれば採取されたものが、漢字が同じばかりにあるいは、漢字があてられてないばかりに採取されぬものがあつた。同時に、■…の各項下に多くの漢字があててあつても原則として第一番目のものしか生かされてゐない。かういつた種々の不備がある。かうした点にかんがみ、早々に不備を補ひ、むしろ本格的語尾音辞典を完成すべくこころざしてゐる。漢語サ変動詞や、形容動詞(これについての意見は承知しつつも)については本索引は殆んど無力である。さきの「現代語篇」との詳細な比較は遂げてゐないが、編者の異なる底本によつたため、例へば、「現代語篇」では、

いけしゃあしゃあ

は「ア」部にあり、本篇では、

いけしゃあしゃあと

と「ト」部に出てくるのは単語認定の意識として興味おかい。

なほ、394 頁下段の「ご-さまい【五三昧】」はこの語形ならば、この頁の上段、「ごぞ-ふね」の次にあるべきである。あるいは、「ご-さんまい」のミスプリントかもしれない。それならこの位置でよい。本索引では「ごさまい」のまま収めた。

れん-し【蓮枝】 (1074 頁)  
 くわ-れう【過科】 (348 頁)  
 ぐわっ-てんし【月天子】 (347 頁)  
 ばんかち【番鍛冶】 (851 頁)

だけは、「連枝」「過料」「ぐわってんし」「番鍛冶」と直した。 (「ご-れんし」は「御連枝」425 頁。「ばんかち」の項では、説明中にも「刀鍛冶」とある。) この索引の作成にも、次の諸君の協力があつたことを記して謝意を表する。

石原史子 上田加代子 春日咲子 佐野裕子 佐橋美典  
 島 充代 鈴木敬子 鈴木淳子 高井直子 高須貴美子  
 中村由理子 尾藤ひとみ 前田あさみ 山口訓代 (敬称略、五十音順)

また、「現代語篇」公刊後、いろいろの方から、わが方にもさういふ計画があつた、また原稿がある、等々の話がよせられた。中で斎藤義七郎氏はその公刊を喜んだ上で、氏の編にかかる

「日本語の語尾分類によるさかさ引辞典 動詞篇」(昭和43年4月4日, 77 頁)

「日本語の語尾分類によるさかさ引辞典 そのⅡ 形容詞篇」(昭和43年5月23日, 19 頁)

の油印の労作をわざわざお送り下さった。いづれも大言海からぬき出された「やまとことば」中心のものである。また、刊行されなかつたが、331 頁に及ぶ名詞篇(約 6600 語)もある。かかる労作を「現代語篇」に紹介しなかつた非礼をおわびしたい。氏は語源を考へることに主眼をおかれた。わが索引も、第一の目的は語構成を考へるにあつたが、その目的は、本来はこの古語篇がより色こくもつものである。目的をよく聞かれるが簡単にいへば上記のとほりである。しかし単に目的はそれに限らない。しかし、今はもう言ふを控へる。誤りなきを期したが思はぬ過誤もあらうと思ふ。御批正を乞ふ。

昭和 54 年 2 月

編者しるす

(文責 田島敏堂)

\* \* \*

公刊に際して

本篇の発刊は五月初旬の予定であつた。今に遷延した理由の大半は漢字にある。校正のエネルギーの大部分が漢字の字体を直すのに使はれたといふも過言ではない。漢字の活字の事情がことのほか悪いことを思ひしらされた。印刷所の方々も苦勞されたやうだが、何回直しても直って来ない校正刷をみては、見えざる何かとの闘ひをしてゐる如くに感じた。つひにはあきらめたものもある。底本との漢字字体の相違については見落しも勿論あらうが、かかる事情をも御承知おき願いたく思ひ一言した。

昭和 54 年 7 月